

一橋大学博士学位申請論文審査報告書

平成 29 年 3 月 8 日

申請者：栗田真広

論文題目：インド・パキスタン紛争における紛争の展開に関する考察——核保有国間の地域紛争における「冷戦モデル」の妥当性をめぐって

審査員：山田敦（主査）、青野利彦、秋山信将

核兵器をめぐる諸問題は、冷戦時代はもとより現代でも、国際政治の政策立案および学術研究の両面において中心的な論争点でありつづけている。と同時に、論争の焦点は時代とともに変遷してきた。今日の焦点の 1 つは、核兵器の拡散リスクが増大するなか、核保有国間の地域紛争において核戦争が生じるリスクをどのように評価するかという問題である。本論文は、この問題に取り組むべく、インド・パキスタン紛争を事例として、理論的・実証的な分析を行った意欲的研究である。論文は、全体の目的と構成を提示する第一章（序章）、先行研究を検討して本研究の仮説を示す第二章、その仮説の妥当性を検討する第三～第五章、そして結論部の第六章から成る。

本論文には、以下のような優れた特徴が認められる。第一に、当該問題に関し「通説」とされてきた既存理論を大胆に見直そうとしている点である。印パ紛争については、核戦争の深刻なリスクが存在するという評価が定着している。そのような見方を支えてきたのが、「安定-不安定パラドックス」および「エスカレーション・ドミナンス」と呼ばれる限定核戦争に関する理論である。本論文は、まずこれら 2 つの既存理論に対し疑問を呈するところからスタートする。第二に、それら既存理論の誤謬を一方では論理的に、他方では実証的に明らかにしようと試みている点である。論理的な考察においては、2 つの理論が「冷戦モデル」と称されるように、米ソ冷戦を念頭に構築されたがゆえに、地域紛争への援用にもっと慎重であるべきことを指摘する。いかに有力な理論といえども、国際政治の時代的文脈と切り離しては有効性を保つことができないという指摘である。それを実証的に印パ紛争の事例で明らかにしていくわけであるが、第三の特徴として、その実証研究がきわめて精緻に展開されている点を挙げたい。膨大な文献・資料を駆使し、印パ紛争に関する邦文の研究としては最も詳細なものに仕上がっている。安易に結論には飛びつかず、自らの仮説に合致した結果を慎重に提示していく手法も、高く評価しうる。

本論文にも問題がないわけではない。時代的文脈を先行研究批判の根拠とするのであれば、本研究が取り上げる印パ紛争もまた時代による変化と無縁ではあり得まい。たとえば紛争がグローバル化する時代に「地域紛争」に限定した本論文の仮説がどれほど有効なのか、自ら問い直す必要があるだろう。他方で、時代を超えて継続する国際政治の特徴もあるはずであり、冷戦時代の理論を「冷戦モデル」と一括して批判する見方にも疑問が残る。もっとも、これらの問題は栗田氏自身が今後の研究課題として認めるところであり、本論文の価値そのものを損なうものではない。

以上のような論文の評価と口述試験の結果に基づいて、審査員一同は、申請者栗田真広氏に一橋大学博士（法学）の学位を授与することが適当であると判断する。